小学校英語活動・国際教育における協同授業の試み

北條礼子*・野地美幸*・尾矢貞雄**・土田かほる***

０．はじめに

平成15年度～平成18年度科学研究補助金（基盤研究（B）(2)「公立小学校の英語科導入に関する包括的開発研究」（代表者：齋藤九一）と平成17年度～平成18年度研究プロジェクト研究「国際理解に焦点をあてた小学校英語活動の学習プログラム構築」（代表者：北條礼子）の取り組みの一環として，上越教育大学と附属小学校が近年協同で英語活動を中心とした授業を行っている。本稿ではその研究成果の一部について報告する。

研究１　「社会」の内容を取り入れた小学校高学年の英語活動

1.1　研究の背景

小学校英語活動の内容を決めるにあたっては，子どもの発達段階に合った，子どもの興味関心に即した，身近な，題材を扱うべきである。これは文部科学省（2001）をはじめとしてよく指摘されることであるが，小学校高学年を対象とした英語活動は，生徒が英語で理解できる（あるいは表現できる）ことが限られている中で，活動の内容をどのようにして充実させるかが課題となっている。

文科省が22,031校の公立小学校を対象に行った「平成18年度小学校英語活動実施状況調査」の活動内容に関する結果から現状を探ってみよう。

表１－１：平成18年度小学校英語活動実施状況調査〈活動内容〉

	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
歌やゲームなど英語に親しむ活動	17,279校	17,460校	19,515校	19,678校	19,778校	20,087校
交流活動など実体験を通じて英語や異文化に触れる活動	6,344校	6,461校	7,970校	8,269校	8,809校	9,258校
簡単な英会話（挨拶、自己紹介）の練習	14,707校	15,302校	18,616校	19,005校	19,432校	19,828校
英語の発音の練習	11,071校	11,321校	14,336校	14,814校	15,522校	15,984校
文字に触れる活動	3,072校	3,320校	5,730校	6,883校	8,635校	9,622校
その他（上記に属さないもの）	436校	464校	610校	607校	741校	801校

この調査によると，内容に関しては全学年を通して「歌やゲームなど英語に親しむ活動」の実施が多く，高学年でも19,778校（98％），20,087校（97.6％）と実施率が最も高くなっている。この結果から特に高学年に関してはマンネリ化を避け，歌やゲームが単調にならないよう工夫が必要な状況にあると言えるであろう（樋口ほか（編）（2005：190）も参照）。また，「文字に触れる活動」や「その他」の活動も学年が上がるにしたがって実施している小学校が増え高学年の活動に幅がでてきていることがわかる。この結果から，実際現場の先生方が児童に飽きさせないよう工夫している様子が伺える。

＊ 上越教育大学　＊＊ 上越教育大学附属小学校　＊＊＊ 群馬県前橋市立新田小学校

では具体的に小学校高学年が意欲的に取り組むことのできる内容のある活動としてどのような可能性が考えられるかであるが，ここでは教科内容と言語教育の統合の試みに着目したい。他教科の内容を言語教育と結びつけた指導は，教科内容に基づいた教授（content-based instruction，CBI）と教科内容に関連した教授（content-related instruction，CRI）の２つに大別される。CBIは教科内容の指導を主眼とし，CRIはあくまでも言語教育が重視され他教科の内容に関しては補足・強化程度に留まる。CBIは日本の公立小学校での英語活動の現状にはそぐわないが，CRIに関しては，アメリカでの小学校外国語教育プログラム（Foreign Languages in Elementary Schools，FLES）において効果を挙げていることが紹介されており（Curtain and Pesola（1994）），日本でも実践例が報告されつつある（小泉（2003）は昭和女子大附属昭和小学校での実践を，長井（2006）は神奈川県内公立小学校での実践を報告している）。Curtain and Pesola（1994：156）はCRIの利点として，生徒が第二言語を獲得するだけでなく（副次的にではあるが）教科の知識の復習や定着を図ることもできると指摘している。この指導方法を用いて更に実践を重ね活動に幅が出てくれば，特に小学校高学年の英語活動の授業内容の一層の充実が見込まれる。

以上小学校英語活動の指導内容について述べてきたが，英語活動の指導者養成の問題についても少し触れたい。「学級担任を中心に進められるのが望ましい」（文部科学省（2001：14））とされる英語活動の指導者をどう養成するのかという問題である。具体的には，現職の小学校教員はもとより，小学校英語活動の将来の担い手となる初等教員養成系大学の大学生がどのように英語活動の実践力を養うかというのも重要な課題となっている（樋口ほか（編）（2005：10章４節）を参照）。指導者の資質・能力という観点から大学でどういったカリキュラムを組むかに議論が集中することが多いが，教育実習等で実際大学生が小学生を相手に英語活動を実施する機会も是非確保したいところである（大学における小学校教員養成の現状と課題に関しては松川（2004：第３章）を参照）。

1.2　研究の目的

前節では，小学校高学年を対象にした英語活動の内容の問題，そしてまた初等教員養成系大学での英語活動指導者養成の問題，について触れたが，本研究はこの二つの問題に対応する試みとして附属小学校と連携しながら行った英語活動について報告する。指導上工夫が強いられ比較的指導が難しいとされる小学校高学年対象の英語活動について大学生が実践を通して理解を深められるようにとの意図の下，「社会」で学習した内容を組み入れた小学校5年生対象の英語活動を計画し，その英語活動を小学校教員志望の大学生に担当してもらった。

1.3　研究の方法

1.3.1　実施時期：平成18年11月～12月

1.3.2　参加者：本学学部学生３名，本学大学院生１名，大学教員１名，附属小学校教諭１名

1.3.3　手続き：

英語活動を計画するに当たり事前打ち合わせを行い，日程の調整，役割分担等について話し合った。また，小学校で実践を行う前に学部学生は毎回３，４回活動案に基づき練習を行った。そして英語表現について英語母語話者に最終チェックをしてもらった後に，英語活動を３回実施した。活動内容は１回目が日本の農産物，２回目は水の循環，３回目は地図記号，に焦点をあてたものとなっている（詳細は野地（2007）に載せた活動案を参照）。

1.3.4　測定具：５段階尺度形式アンケート５項目

上記アンケートはTsuchida（2000）を基にしたものである。

1.4　結果

英語活動の直後にアンケートを実施した。３回分のアンケート結果を表１－２に示す：

表１－２：５年生（*N*=32）の授業に対する感想（*M*：平均，*SD*：標準偏差）

項目内容	１回目		２回目		３回目	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
１．楽しかった	4.21	1.01	4.09	1.03	4.32	0.84
２．大きな声で話せた	2.88	1.30	3.10	1.05	3.00	1.23
３．進んで参加できた	3.24	1.35	3.56	1.30	3.56	1.26
４．わかった	3.94	1.10	3.47	1.28	4.09	1.06
５．またやってみたい	4.27	1.02	4.06	0.89	4.29	0.87

３回共平均が４以上の比較的高い項目は１「楽しかった」と５「またやってみたい」の２項目であった。また３回の活動を通して平均が一番低かったのは２の「大きな声で話せた」であった。

アンケートの最後に自由記述欄を設け特に楽しかった点についても記述してもらったが，特に社会の内容を扱ったことに言及しているものについて分析を行った。結果は次の通りである。

表１－３：特に楽しかったこととして社会の内容に触れているものの件数と具体例

１回目	12件（38％）
	社会の授業に近かった。楽しく学べてよかった。
	色々な特産物を知れて楽しかった。
	一番最後にやったゲームが，英語でなく社会の勉強にもなった。
	一番楽しかったのは名産をあてるゲームです。またやりたい。
	社会勉強になった。最後のゲームも楽しかった。
２回目	６件（19％）
	最後にやった水のことがとても楽しかったです。
	楽しくて夢中になったのはウォーターサイクルで，社会のように水がどうなっているのかわかった。
	サイクルゲームが英語以外も勉強できて面白かった。
	サイクル問題が楽しかった。またやりたい。
	サイクルゲームで夢中になりました。
３回目	９件（28％）
	最後のクイズ（日本の人口？）がとてもわくわくして楽しかった。
	日本のマークや外国の郵便局のマークなどを当てたりするゲームや日本のクイズなどが楽しかったです。
	社会と英語がいっぺんに勉強できたこと。
	最後に外国のマークが分かって楽しかった。
	最後にやった、いろいろな国の地図記号

1.5　考察

まず表１－２のアンケート結果について取り上げてみたい。項目１の「楽しかった」は３回共平均が４以上であったことから，５年生は概ね英語活動を毎回楽しめたようであった。また，項目５の「またやってみたい」についても３回共平均が４以上となったことから，今回の活動が学習意欲と結びついたことを示しており，活動内容が彼らの興味を惹きつけたと解釈できるであろう。一方，項目２の「大きな声で話せた」の平均が他の項目と比べて低くなっているが，これは聴いて反応してもらう活動が中心で，話す機会が少なかったことが影響していると考えられる。

次に，表１－３の自由記述の結果に着目してみよう。記述内容から５年生が活動内容についてどう受け止めたかがわかる。今回「社会」の内容を組み入れたことに対して毎回一定の割合で肯定的な意見が出されている。したがって，この結果からも，今回の活動内容が全員ではないかもしれないが一定の児童の興味・関心と合致したと言えるであろう。

研究２　小学校英語活動・国際理解に関する協同授業

2.1　研究の背景

文部科学省による「総合的な学習時間の実施状況の調査」結果（18年３月）によると対象となった全国の公立小学校のうち国際理解をテーマとして選択していたのは第６学年が最も多く，26.9％であった。国際理解というテーマであっても，その内実は国際理解というより英語活動を実施している小学校が多いと推察される。一方，国際理解とはいえ，その内容はALTや地域の外国人が自国の食べ物，遊びを紹介するものがほとんどであり，ややもすると表面的な体験で終わってしまうことも多いと考えられる。また，近年上越市近隣の小学校から英語のゲームを楽しむだけで国際理解になるのだろうか，という疑問も寄せられている。

今回，協同授業を実施した上越教育大学附属小学校では英会話活動は「総合的な学習の時間」の枠組みでは実施されていない。同校で国際理解に関する授業はそれほど多く実施されていないことがこの取り組みの発端ともなった。平成17～18年度上越教育大学研究プロジェクトを受け，大学と附属小学校が協同で国際理解あるいは小学校英語活動に取り組み，国際理解を取り上げる際には，内容が可能な限り表層的で終わらない学習活動プログラムを作成することを目標とした。ただし，同研究プロジェクトでは，小学校英語活動，国際理解のどちらの内容を主にするかについては担当学生の希望を重視した。学習プログラム開発の手続きして，同小学校で英語活動を担当している尾矢教諭と協同の基，本学大学院生，学部生，研究生の考案する学習プログラム案を考案し，実施した。なお，単発の学習プログラムであっても，小学校の各学年にふさわしい内容の学習プログラムの構築を目指した。ここで扱うのは，同研究プロジェクトで開発した学習プログラムに対する児童からの評価である。

2.2　研究の目的

本研究の目的は表層的な内容にとどまらず，児童の知的好奇心をも刺激し得る小学校英語あるいは国際理解のため構築した学習プログラムの成果を検討することである。

2.3　研究の方法

2.3.1 実施時期：2006年12月から2007年２月

2.3.2 参加者：本学大学院生９名，研究生１名，学部生２名
大学教員１名，附属小学校教諭１名

2.3.3 手続き：本学附属小学校の全面的協力の基，全６学年各２学級の計12学級において，参加者各々が１学級ずつを担当し，学習プログラムを作成した。その手順としては，まず授業実践に先立ち，各学級の授業を授業実施予定の約１週間前に参観し，可能な場合は授業考案者の疑問点等を各学級担任に直接聞いた。その上で，各自が各学級に合った内容の学習プログラムを考案し，授業を実践した。作成された12種類の学習プログラムの内容は，各授業者の専門，関心事に一任したので，最終的にその内容は小学校英語活動を直接扱ったものから，英語を用いない国際理解教育まで多岐にわたるものとなった。

全活動内容と担当者の一覧は表１に示すとおりである。

2.3.4 測定具：1－3年生用アンケート４段階尺度形式８項目
4－6年生用アンケート４段階尺度形式27項目

なお，上記の２種類のアンケートは，角谷(2006)を基に，平成17年度採択「教員養成GP」の平成17年度の「小学校英会話を支援する国際理解カリキュラムの開発研究」において，項目内容や表現等を再吟味して作成したものである。

表２－１：12種類の学習プログラムの担当者と活動内容

学級	担　当　者	活　動　内　容
１－１	大学院生 （現職中学校教員［英語］）	虹の色（簡単な英語を聞き，聞いた英語を動作で表せる。英語を聞くことや英語の歌を歌うことに興味をもつ）
１－２	大学院生 （元高校教員［英語］）	英語を聞いて体を動かそう（児童の生活に身近な英語の動詞(jump，skip，walk，run，swim，eat)に慣れ親しみ，動作を頼りに単語の意味が推測する）
２－１	大学院生 （現職小学校教員）	マジックＳの働き（単数と複数）
２－２	研究生 （現職小学校教員）	How's the weather?　天気はどうですか？
３－１	学部生	中国語に触れ，慣れ親しむ （中国人留学生とのティーム・ティーチング）
３－２	大学院生 （現職高校教員［英語］）	動物の鳴き声 （動物の鳴き声の表現の仕方の違いを題材にして異文化理解を進める）
４－１	大学院生 （現職高校教員［社会］）	世界のトイレ
４－２	学部生	世界のいろいろな数字にふれよう!!
５－１	大学院生 （現職高校教員［英語］）	世界の主要都市と時差
５－２	大学院生 （ストレートマスター）	日本の伝統・文化を知ろう－お正月って なぁに？－
６－１	大学院生 （現職高校教員［社会］）	オーストリアに行こう！
６－２	大学院生 （ストレートマスター）	日本語のなかの外来語－ことばのつながりから国際理解へ－）

2.4　研究の結果

以上の学習プログラムを実施し，各学級の児童から評価（４点満点）を得たが，その結果は，表２－２，２－３に示すとおりである。

表２－２：１年生から３年生までの各クラス人数（*N*）ならびに授業に対する感想の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）

番号	項目内容	１年１組 (*N*=32)		１年２組 (*N*=36)		２年１組 (*N*=30)		２年２組 (*N*=29)		３年１組 (*N*=31)		３年２組 (*N*=27)	
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	楽しかった	3.94	0.25	3.54	0.74	3.80	0.48	3.93	0.26	3.94	0.25	4.00	0.00
2	もう知っていることばかりだった	3.41	0.67	2.91	1.12	2.70	0.84	2.36	0.73	1.71	0.69	2.19	0.92
3	やることが多すぎて大変だった	2.66	0.94	2.31	1.23	1.70	0.88	2.11	0.74	1.39	0.62	1.37	0.74
4	わからないことばかりだった	2.41	0.91	2.46	1.04	1.93	0.83	2.32	0.94	2.81	0.95	2.07	1.08
5	もっとやってみたいと思った	3.84	0.45	3.49	0.89	3.77	0.68	3.79	0.42	3.87	0.34	3.96	0.20
6	外国に行ってみたいと思った	3.41	0.91	3.26	1.04	3.13	1.11	3.50	0.79	3.23	0.99	3.52	0.95
7	日本についてもっと知りたい	3.84	0.37	3.40	0.85	2.97	1.00	3.29	0.85	3.35	0.80	3.63	0.50
8	英語をもっと勉強したいと思った	3.72	0.73	3.29	0.93	3.47	0.78	3.79	0.50	3.35	0.84	3.81	0.49

表２－３：４年生から６年生までの各クラス人数（*N*）ならびに授業に対する感想の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）

番号	項目内容	４年１組 (*N*=27)		４年２組 (*N*=33)		５年１組 (*N*=32)		５年２組 (*N*=32)		６年１組 (*N*=37)		６年２組 (*N*=37)	
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	楽しかった	3.39	0.83	3.50	0.58	3.50	0.58	3.53	0.88	3.17	0.98	3.49	0.69
2	自分の力をためせた	2.85	1.12	3.00	0.95	3.00	0.95	2.66	1.00	1.66	0.84	2.43	0.96
3	工夫して学習できた	3.00	1.09	2.94	0.84	2.94	0.84	2.88	0.94	2.00	1.00	2.32	0.82
4	もっと知りたい	3.27	0.98	3.09	1.00	3.09	1.00	3.38	0.98	3.11	1.11	3.22	1.00
5	先生や友達にほめられた	1.79	1.05	1.84	1.08	1.84	1.08	1.56	0.80	1.23	0.55	1.49	0.80
6	よく理解できた	3.36	0.90	3.22	0.79	3.22	0.79	3.19	0.69	2.89	1.11	3.08	0.83
7	役立ちそうなこと	2.85	1.21	3.16	0.99	3.16	0.99	3.41	0.98	3.20	0.90	3.16	0.96
8	知っていることばかり	1.33	0.69	2.22	0.97	2.22	0.97	1.66	0.87	1.20	0.41	1.78	1.03
9	やることが多すぎた	1.33	0.69	1.72	0.92	1.72	0.92	1.84	1.19	2.00	1.03	1.41	0.64
10	わからないことばかり	2.55	1.30	2.28	1.02	2.28	1.02	1.81	0.69	2.74	1.31	1.95	1.05
11	もっとやってみたかった	3.00	1.15	3.19	0.69	3.19	0.69	3.44	0.91	2.74	1.15	2.95	1.05
12	わくわくした	3.18	1.13	3.13	0.75	3.13	0.75	3.34	0.87	2.74	1.17	2.76	0.95
13	おもしろかった	3.30	0.95	3.44	0.62	3.44	0.62	3.56	0.91	3.09	0.95	3.14	0.95
14	やりがいがあった	3.24	0.94	3.31	0.69	3.31	0.69	3.34	0.90	2.83	1.10	2.95	1.03
15	チャレンジする気になった	3.06	1.03	3.19	0.90	3.19	0.90	2.94	0.95	2.34	1.10	2.76	1.01
16	自分に自信がついた	2.67	1.22	2.94	0.88	2.94	0.88	2.81	0.78	2.00	1.00	2.32	1.00
17	全体として満足した	3.18	1.04	3.16	0.88	3.16	0.88	3.34	0.79	2.74	1.10	2.84	1.04
18	外国に興味を持った	3.39	1.03	3.09	1.03	3.09	1.03	2.19	0.86	3.29	1.10	3.30	1.00
19	得意なことを見つけた	2.21	1.19	2.44	0.84	2.44	0.84	2.00	0.95	1.80	0.90	2.00	1.03
20	外国の好きなものを発見	2.42	1.28	2.47	0.95	2.47	0.95	1.78	0.87	2.40	1.06	2.78	1.16
21	外国に行ってみたい	3.33	1.16	3.19	1.09	3.19	1.09	2.38	1.21	3.31	1.08	3.19	1.22
22	授業で知った国に興味を持った	3.18	1.13	3.06	0.88	3.06	0.88	2.25	0.92	2.94	1.06	2.92	1.04
23	日本を知りたい	3.30	1.07	2.78	0.83	2.78	0.83	3.25	0.84	2.03	0.98	2.57	1.09
24	授業で知った国をもっと知りたい	3.24	1.09	3.25	0.72	3.25	0.72	2.63	1.01	2.89	1.13	2.92	1.12
25	授業以外の国も知りたい	3.21	1.08	3.13	0.79	3.13	0.79	2.59	1.13	2.77	1.23	2.92	1.04
26	外国のものがほしい	2.58	1.30	3.25	0.95	3.25	0.95	2.16	1.17	3.03	1.07	2.46	1.17
27	自分が出来ることを発見	2.15	1.15	2.97	1.03	2.97	1.03	2.84	0.95	1.97	1.04	2.36	1.03

2.5 考察

１年生から３年生までの学習プログラムをみると，３年１組が中国人留学生とのティーム・ティーチングによる中国文化に関する内容であった以外の５つの学習プログラムは，英語活動に関する内容であった。表１での学習プログラムはそれぞれ内容が異なっているため単純な比較検討は難しい。そのため，英語活動，中国文化に共通すると判断できる項目の結果に注目する。表２の結果から，項目１の「楽しかった」の平均は４点満点で3.54から4.00を推移しており，児童が大変好意的に捉えていたことがわかる。また，項目５の「もっとやってみたいと思った」の平均は3.49から3.96を推移しており，全般的に児童の学習意欲が刺激されたと思われる。

次に，４年生から６年生までの学習プログラムをみると，５年１組が「世界の主要都市と時差」と題して，英語活動がどちらかというと中心の学習プログラムであった以外，その他の５つの学習プログラムは国際理解に関連する内容であった。表３の結果から，４年生以上の全部の学習プログラムに共通する項目を取り上げると，項目１「楽しかった」の平均は3.17から3.53を推移しており，児童から概ね好意的な評価を得たものと考えられる。また，項目４の「もっと知りたい」の平均は3.09から3.38を，項目13の「おもしろかった」の平均は3.09から3.56を推移しており，児童から概してかなり高い評価を受けたと思われる。

なお，ここでは取り上げないが，各学習プログラムを担当した学部生，研究生，大学院生から，単発であったとしても，学習プログラムを開発した経験が大変よかったとの感想が寄せられた(資質の高い教員養成推進プログラム(平成17年度採択「教員養成ＧＰ」）最終報告書，2007)。

さらに，附属小学校からも，今回取り上げられた「動物の鳴き声」「トイレ」「数字」「時差」「旅行」「外来語」などのテーマは児童の生活に身近なものや興味・関心を引くものであり，児童の知的好奇心を揺さぶるような教材・教具の活用に加えて，授業展開の工夫もあり，授業者の持ち味や専門性を活かせていたとの評価が得られた。

引用・参考文献

Curtain. H., & Pesola, C.A. 1994. *Languages and children: Making the match*, 2nd ed., White Plains, NY: Longman.（伊藤克敏ほか（編）『児童外国語教育ハンドブック』，東京：研究社，2005）.

北條礼子．2007.『国際理解に焦点をあてた小学校英語活動の学習プログラム構築：平成17年度～平成18年度研究プロジェクト研究成果報告書』.

樋口忠彦他編．2005.「これからの小学校英語教育－理論と実践－」．　東京：研究社.

上越教育大学教員養成プロジェクト実施委員会．2007.「マルチコラボレーションによる実践力の形成」『資質の高い教員養成推進プログラム（平成17年度採択「教員養成ＧＰ」）最終報告書』.

小泉清裕．2003.「高学年向き各教科の内容を取り入れた英語活動の実践」．松川（編著）『小学校英語活動を創る』．東京：高陵社書店，pp.110-12.

松川禮子．2004.『明日の小学校英語教育を拓く』．　東京：アプリコット.

文部科学省．2001.『小学校英語活動実践の手引』．　東京：開隆堂出版.

文部科学省．2006．総合的な学習の時間実施状況調査結果の概要（小学校）2007/12/3検索.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/021/06072702/007.htm

文部科学省．2007．平成18年度小学校英語活動実施状況調査集計結果
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/03/07030811/004.htm，2007/12/1検索.

長井純子．2006.「小学校高学年の児童が意欲的に取り組む英語活動のあり方」.『神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告４』．　pp.89-92.

野地美幸．2007.「５年２組の英語活動」斎藤九一（研究代表）『公立小学校の英語科導入に関する包括的開発研究：平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ）(2)）研究成果報告書』．pp.107-112.

角谷詩織 2006.「小・中学生の知的関心の発達と理数科教育での疑問解決経験とのかかわり」文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」（平成14～18年度）新世紀型理数科系教育の展開研究　平成16年度Ａ０５班研究成果中間報告書情報化など，社会や学校の変化が児童生徒の心身の発達や理数科教育への学習意欲等に及ぼす影響及び対応に関する研究」　pp.77-114.

Tsuchida, Y. 2000. *A case sytudy of English club activities at public elementary schools*, MA thesis, Joetsu University of Education.